

# 資料涉猟余話

その154

中部は、王子製紙が工場を建てて盛んに営業していたので、数名の者が訪ねた。工場の門を入ると、短く切られた木が山積みされ、煙突からは濛々と黒煙が上がっていた。当時、遠山地方から大量の木材が伐り出され、筏でここに運ばれた。また、ここからは紙船もしきりに下った。

一行が中部を出発したのは午前十一時である。王子製紙の煙突から出る黒煙を左に眺めながら進むと、佐久間下の難所「豆こぼし」であ

は遅々として進まない。そのため、誰も舟に飽きて退屈になる。一行は小港雲名で休憩をとった。そこを発つて少し行くと、長蛇の如く空中に横たわるものが見えた。二俣橋(後)に、鹿島橋・天竜橋

## 昔日の天龍川探勝記録 下

### 中部〜鹿島の舟行とまとめ

鎌倉 貞男

と名を変える)であ

る。北鹿島と西鹿島を結ぶこの橋は、明治四十四年、飯田の矢沢四郎がかけた。工費五万円を要したという。明治以降の川下り舟は多くここが終点であった。中部を発つてほぼ四時間後の午後三時、一行は当時の二



中部での歓迎



久根銅山下での停船

く、流れが静かだが、砂の浅瀬がある。水面が光り、川の様子不明。5、淵 水深は深く、棹が使えない。渦巻きがあり、権の操作が自由にならない。こうしてみると、棹一本、権一挺に命を託して下る船頭の緊張感も大きかったに違い無い。この後、大正から昭和にかけて、三人を終える。

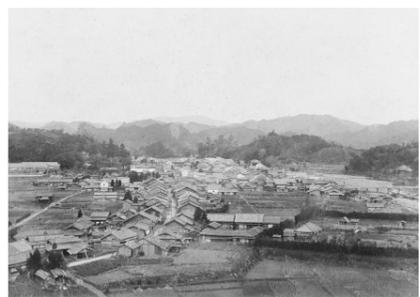
まで一行を見送った。ここに述べた探勝隊の一行は、時又から鹿島まで二百をかけて下ったが、多くは一日で下る。舟一艘に約二十五人まで乗せることができ、乗船賃は六十円だった。

大きく半円を描いて回る所。円の外側は水勢が強く水深も深い。この後、大正から昭和にかけて、三人を終える。

遅い夕食を終え、東京の記者八名は、浜松発十一時十四分の夜行列車で帰京の途に就いた。一同はホームまで見送り、別れを惜しんだ。なお、この日、平岡村前村長は浜松まで、同村校長は中部通過していく船頭の



「雲名(うんな)」での停船



当時の二俣の町